

家々の海から

白浜で出会った生きもののたち

31

京都大学助教授 久保田 信 (京都大学 瀬戸臨海実験所)

南の海からの便り2

【奄美大島古仁屋港の「豊潮丸」にて】台風2号通過の影響で2日間足止めを食ったが、5月21日に奄美大島名瀬港を出航することができた。

伊是名島で停泊中、「豊潮丸」右舷横に夕方から夜明けまでつるした水中集魚灯で、ヒメアンドンクラゲ(新称)を計7個体採集することができた。このクラゲは、かつて白浜で一度だけ捕獲された記録はあるが、その後見つかっていない南方系のクラゲだ。

成長しても5センチ位の小さな立方クラゲで4本の触手を持ち、敏速に游泳する。クラゲ類の共同研究で同乗した水産大学の上野俊士郎教授が船内で飼育観察を続け、興味深い行動が見られた。

普通、クラゲと言えば「水中をフワフワ」といライメージがあるが、ここで透明な楕(くし)クラゲは飼育容器の底ゲがよく見え、白浜付近

ユニークな動物がいっぱい

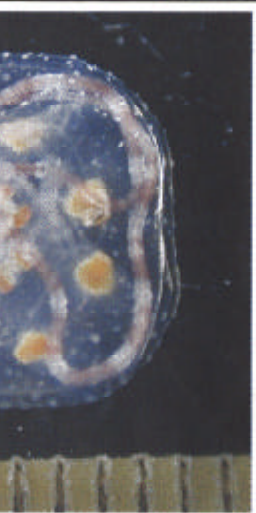
「ウミズズメバチクラゲ」が示す睡眠行動につながるものだろう。形態をよく見ると、傘の頂上部に4個のオレンジ色の付着器があり、これを用いて水族館でおなじみのサカサクラゲのような体勢になっている。また、光と重力を感じる感覚器も備わっている。

一度だけ記録があるアカタマクラゲをすくい上げることができた。体長8センチもある巨大個体で、透明な60ccポリ容器にあふれんばかりだった。指でつつくと黄褐色のインクを噴射して容器の海水を着色した。インクの出所を顕微鏡でぞくぞくと観察すると、隣り合う楀板の間に1個ずつある赤い斑点(はんとん)がインクつぼであることが確認できた。インクはここから何度も噴出された。液をなめると苦かった。おそらく海中で毒敵に襲われたとき「苦味のある煙幕」が威力を発揮するのだろう。

アカタマクラゲの傘頂部には三角錐(さんかくすい)状のゼリー質の突起が2つあり、それぞれからムチ状のものが伸びている。顕微鏡で数百倍に拡大して観察したが特別な構造はないし、楀クラゲ特有の膠胞(こうほう)は1個もなく、そのムチ状のものの機能は不明だ。

古仁屋港では、25日午前2時から明け方の5時までにかけて数百個体もが集魚灯の周りに群泳してきた。奄美大島西方沖の水深300メートルの海底をじ

このほか、ウニやナマコ、ヒトデ類の親せきで、生きた化石と言われるワカサギ類が多数採集された。最後に深海底に突き刺さっているカイロウドウケツが一個体だけ採集された。まだ小さく、長さ10センチ程であった。ガラスカイメンの仲間であるが、その美しい格子状の骨格は黄褐色の軟体部の色に隠れて見えない。中には夫婦の契りのシンボルとされているドウケツエビが入っていたが、これがまた小さかった。カイロウドウケツ類は南部町堺港でもたまに網にかかっている。



ホリ容器底に付着して休息中のヒメアンドンクラゲ(新称)。スケールは1cm。(上野俊士郎教授撮影)



へん平な面からみたアカタマクラゲ(久保田、1997改写)

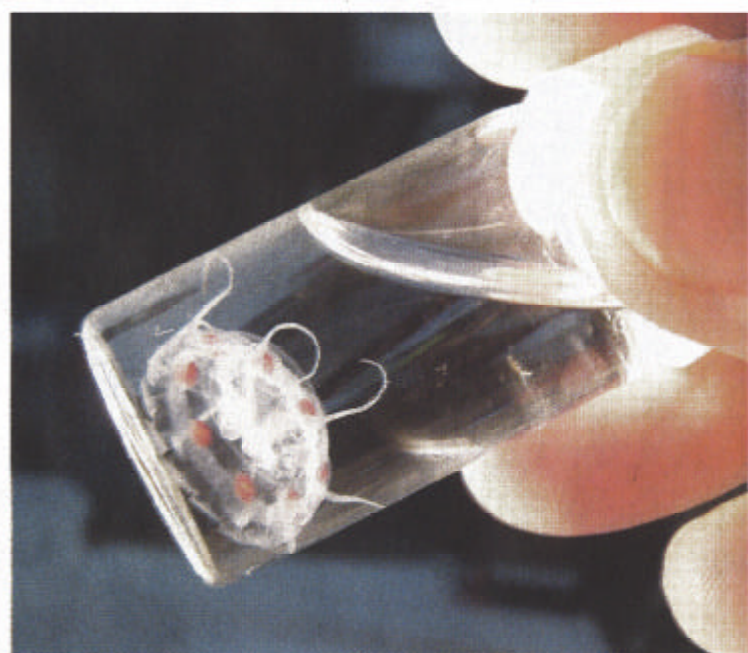
と、隣り合う楀板の間に1個ずつある赤い斑点(はんとん)がインクつぼであることが確認できた。インクはここから何度も噴出された。液をなめると苦かった。おそらく海中で毒敵に襲われたとき「苦味のある煙幕」が威力を発揮するのだろう。

古仁屋港では、25日午前2時から明け方の5時までにかけて数百個体もが集魚灯の周りに群泳してきた。奄美大島西方沖の水深300メートルの海底をじ



の種類であるとのこと。暗黒の海中では赤色は黒く見えるので毒敵から身を守るのに最適だとい

た。体長30センチ余りの完全個体もあったが、がく部の取れた個体も多かった。さらにウミユリ類から進化したと言われるウミシタ類も多数採集された。これらにもコシオリエビ類が共生しており、大澤博士によると極めて珍しい種も見られたとのことだ。



幼体のエフィラ段階で成熟した小さな鉢クラゲのエフィラクラゲ

深海性ガラス海綿、カイロウドウケツ

深海性の抱卵したジンケンエビ属の一種